

投稿

日本天文遺産となった「明月記」

佐久田健司、高梨直紇（東大 EMP）

1. はじめに

2019年3月13日、日本天文学会は藤原定家（1162年～1241年）の日記である『明月記』を、第1回の「日本天文遺産」に認定したことを公表した（図1）。客星の記録など数多くの天文現象の記載があることから、以前よりその天文学的な価値は広く知られたものであったが、今回改めてこのような認定を受けたことは喜ばしいことであった。

さて、この『明月記』の日本天文遺産への認定であるが、そこに至るまでにどのような経緯があったかを知る者は少ないだろう。『明月記』の推薦者となった著者のひとり（佐久田）は、法学部を卒業後ずっと金融関係の職に就いており、『明月記』はもちろんのこと、天文学や教育普及とはまったく縁の無い生活を送ってきた。それがなぜ、今回、『明月記』を推薦することとなったのか。今後の天文学と社会の関係を考える上でも興味深い事例と思われることから、その経緯について当事者の視点からここに記録として残したい。



図1 2019年日本天文学会春季年会での認定式

2. 天文学との出会い

著者（佐久田、以下特に断りがない場合は佐久田を指す）が天文学に初めて触れたのは、今からおよそ10年前、2009年のことであった。勤務先から派遣されるかたちで、その前年に東京大学が発足させたばかりだった社会人プログラム（東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム、東大 EMP[1]）に参加したことがきっかけであった。東大 EMPは、企業や官庁などで働く30～50歳代の社会人を主な対象としたプログラムである。社会人向けではあるが、経営学やリーダーシップ論などのいわゆる実学志向の場ではなく、アカデミアが扱うあらゆる分野の学問に触れられることが特徴となっている。

このプログラムで取り上げられる学問分野には、当然ながら天文学や宇宙論が含まれる。こうした天文学関係の講義シリーズの冒頭に講義を担当されたのが、東京大学名誉教授の岡村定矩氏であった。宇宙の年齢やその起源の詳細、さらにはダークマターやダークエネルギーのことさえ知らなかった著者にとって、現代の科学によって明らかにされた宇宙の姿は新鮮で興味深いものを感じられた。『明月記』に、超新星爆発などの天文現象の貴重な記録が残されていることを知ったのもこの時のことである。

著者は、プログラム修了後も、講義モデレータとして岡村氏の講義を担当する機会を何度か得、ますます宇宙への関心を深めていった。その中で、天文学や宇宙論の分野で、わが国の大学や研究者が世界的に大きな貢献をしていることを知ることとなった。お世話になった岡村氏が日本天文学会の理事長（当時）であったこともあって、会費を納めて天文学

を支援したいという気持ちを持つようになり、2012年には日本天文学会に準会員として入会した。

著者が天文学と触れる機会は、これをきっかけに少しずつ広がっていく。天文学普及プロジェクト「天プラ」の行っていた「まるのうち宇宙塾」[2]などのイベントでは、若手研究者の話を聞く機会を持つこともできた。また、ちょうど子供が小学生になる頃から東京・王子の駿台学園で開催されている「ジュニア天文教室」[3]に親子で参加するようになり、中学入試の準備で忙しくなるまでの数年間、講師の中嶋浩一氏による解説や観測を通じ、科学や天文に親しむ機会にも恵まれた。昼間の青空に肉眼で金星が見えると教えていただき、中嶋氏と一緒に屋上から探してようやく見つけることができたことなども、親子の良い思い出となっている。このようにして、著者と天文学との関係は細く長く続いていった。

3. 『明月記』との出会い

著者と『明月記』との出会いは、天文学以上にほんの偶然からであった。

2017年1月、著者が新聞を読んでいると短歌の投稿欄に著者の仕事と関係する内容の投稿歌が掲載されていることに目が留まった。数日後、ある知人にその投稿歌のことを雑談として話したところ、こんな皮肉めいた反応があった。「な～んだ、佐久田さんの短歌が載ってる、っていう話じゃあないんですね」

著者には、その瞬間、思いがけず「言われっぱなしじゃあ口惜しいなあ」という気持ちが湧いたのだった。とはいえ、短歌など作ったことは（学校の国語の授業を別にすれば）ない。週末になるのを待ち、近所の図書館の本棚から「短歌の作り方」のような入門書を借り、見よう見まねで歌を作って投稿を始めた。すると思いがけず何度目かの投稿で掲載されることになった。

さらにその数か月後。著者がこの話のある知人にしたところ、「佐久田さんは大学の時に京都にいらしたそうだし、短歌もされるとおっしゃるので、こんなことに興味はありませんか」と、冷泉家時雨亭文庫[4]が賛助会員を募っていることに話が及んだ。年1万円で会員になると、今も昔のまま京都に残る冷泉家の邸宅やそこでの行事などを見学する機会が得られる。著者にゆかりのある京都のことであり、和歌や短歌、冷泉家のさまざまな行事などへの興味もあって、すぐに入会の手続きをとった。

そして2018年8月。著者は京都を訪れ、冷泉家に伝わる七夕の行事である「乞巧奠」（きっこうでん）を見学する機会を得た。七夕の星に歌を捧げ、歌道の上達を願う儀式が、平安以来の伝統を思わせつつ進んでいく様子は興味深いものであった。現代の七夕行事や歌会しか知らない著者には、いにしえから続く歌への思いや歌の楽しみ方はかえって新鮮さがあり、暑い盛りの京都の夜が、あつという間に更けた一日だった。

4. 『明月記』を日本天文遺産に推薦する

「乞巧奠」から数週間経った2018年9月のある日。著者は、日本天文学会が日本天文遺産への推薦を募っていることに気がついた。初回の推薦は9月末を〆切とする、対象物の管理者にはなるべく事前に断ったうえで推薦してほしい、とのことであった。

「乞巧奠」の記憶もまだ鮮明な著者の中に、とっさに『明月記』は認定されて然るべきだが、日本天文学会と冷泉家の両方にご縁があるのは、私だけかもしれない」という思いが浮かんた。『明月記』の持つ価値からすると、日本天文遺産の第1回の認定に万が一でも漏れることは避けたい、という気持ちが湧いてきたのだ。

同時に、「天文学コミュニティの中で特別な

活動をしたこともなく、専門家でもない私が推薦をしていいものだろうか」という躊躇を著者が覚えたのも、正直なところだ。しかし、べ切は迫っており、ぐずぐずしている暇はない。早速、岡村氏をはじめ何人かの先生方にご相談をしたところ、皆さん一様に「いいことだからぜひ推薦するように」という反応であった。これに背中を押され、著者は手許で入手できる資料を参考に急いで推薦書を書き上げた。並行して冷泉家の了解も得られ、推薦書の提出が叶ったのはべ切直前のことであった。そして、『明月記』が『会津日新館天文台跡』とともに、第1回の日本天文遺産に認定されたのは、周知の通りである。

5. 藤原定家の和歌を巡って——本居宣長、正岡子規、そして湯川秀樹

『明月記』が持つ天文学的な価値については、本誌でも“客星あらわる”[5]、“藤原定家の客星”[6]、“明月記コースと藤原定家”[7]などの記事で繰り返し紹介されているのでここでは触れない。しかし、客星の記録を残した藤原定家その人について踏み込んだ紹介はなかったと思われるので、ここでは和歌の観点から論じてみたい。

藤原定家は、今からおよそ800年前の時代を生きた貴族であり、わが国の文学史上特筆すべき歌人でもある。一般には『百人一首』や『新古今和歌集』の撰者として広く知られている。

現代を代表する歌人である馬場あき子・米川千嘉子は、藤原定家の和歌について次のように解説している（下線は著者が追加）。

藤原定家は…旧派からは難解歌と批判されながらも、一三世紀初頭白熱する後鳥羽院歌壇の最尖鋭として象徴性の高い華麗な言葉の世界を築いてゆきました。定家らが中心となって撰んだ勅撰集『新古今集』は、この新風

の修辞と艶を尽したもので、『万葉集』の直情や『古今集』のきわやかな情の「あはれ」に拮抗する、和歌史の一つの頂点をなすものといえましょう。西欧の超現実主義（シュールレアリズム）とも通じるような定家の世界、強烈な言葉、修辞への執着は…後世の歌人たちに重く意識されてゆきます。 [8]

中世和歌の解説の中にあつて「西欧の超現実主義（シュールレアリズム）」という表現がまず目を引く。今から800年ほど前の和歌が、なぜこのように評されるのだろうか。『新古今和歌集』の中にある定家の代表歌をみながら、少し考察を加えてみたい。

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

この一首の中には、地名などの固有名詞が現れないことを含め、具体的な景色を写実したと感じさせる表現はない。むしろ、文字の過半は目に映る景色ではなく、その場に存在しない「花」や「紅葉」を語ることに費やされている。このことによって、存在しない「花」や「紅葉」がかえってありありと意識される。その「花」や「紅葉」は——その場にはない、のであるから——個々の具体的な「花」や「紅葉」の写実ではありえない。それは、この歌を読む者ひとりひとりが人生で出逢ったさまざまな「花」や「紅葉」が、こころの中で統合され、抽象化・純化された姿であるはずだ。今、この文章を読まれている方が思い描く「花」や「紅葉」も、きっとそうしたもののだろう。このように順を追っていきとき、この一首が「超現実主義（シュールレアリズム）とも通じる」ことを、はっきりと感じ取ることができると思う。

こうした藤原定家の和歌については、古来、さまざまな批評が加えられている。例えば、

江戸時代の国学者であり、和歌にも通じていた本居宣長は「定家卿は…他の歌よみのとうていおよびえない境地まで歌にしていたので、天下のひとがこぞって尊敬をささげたが、それはほかに例をみないことである。まことに古今独歩の達人であり、末代まで歌の道の師範と仰がれるのは当然である」[9]と、最大級の賛辞をもって藤原定家を評している。

その一方、明治時代に入ると、新しい時代の中で新しい短歌を求める動きが活発になる。そうした近代短歌の黎明期、現実の写実を重視した正岡子規は「定家といふ人は上手か下手か訳の分からぬ人にて…」[10]と、藤原定家の和歌を厳しく批判している。

こうした論争について批評したひとりの科学者が、湯川秀樹である。湯川秀樹は、日本や中国の古典にも深く精通しており、自ら歌集「深山木」も世に出している。その湯川が、上記のような定家の評価をめぐって、次のように述べている。

明治になりましてから、正岡子規のような人が「写実的で直線的なものがいいんだ。古今、新古今はへたで、紀貫之などは実にへたな歌詠みである」というようなことを平気で言うたりしたのは、これはよくものがわかってなかったんで、私も歌をつくるので、正岡子規がどの程度歌が分かっておったかということは、非常によくわかります。要するに、正岡子規という人は歌などあんまり深くはわかっておらなかった、と見るのがごく公平な立場ですね。しかし、あんまりごちゃごちゃと屈折した歌ばかり、皆つくっておったので、一遍もとへ戻るといふことが必要で、逆の極端な説を主張したのはむだではなかったとも思いますね。[11]

初めてこの文章に触れたとき、著者は、素粒子物理学と藤原定家の和歌とがあたかも二

重写しに見えるような思いを持った。素粒子物理学は、私たちが五感で認識し経験できる世界を「写実的で直線的」に描写するものではない。そうではなく、そうした世界のより深部に存在する真理を追求する学問領域であると、著者は受け止めている。湯川秀樹のころの中で、こうした素粒子物理学の性質と藤原定家の「超現実主義（シュールレアリズム）」とが重なり合ったのではないかと、著者には思えたのだ。

そのように見ていくと、藤原定家が「旧派からは難解歌と批判」されたこと（前掲の馬場・米川による解説文の下線部を参照）も、湯川秀樹との重なりを持つように思えてくる。湯川秀樹が構想した新しい理論である中間子論が、ボアから「新粒子がお好きなのですね」という批判的なコメントを受けたというエピソードが、思い出されるからである。

湯川秀樹の、まして、藤原定家のころの中は、今となっては知る由もない。しかし、和歌を通じて見えてくる両者の自然への眼差しは、相通じるものがあるようである。こう感じるのは、著者だけであろうか。

6. 『明月記』から考える天文学と社会

天文愛好家の間では、『明月記』は超新星爆発やオーロラ、日食などの天文現象の記録を含んだ古文書として、広く知られている。しかし、藤原定家は、天文学者でも占星術師でもなかった。したがって、その日記である『明月記』は、当時の社会情勢や大小の事件、日々の生活、そして、その中での藤原定家のさまざまな思いが主な内容となっている。

『明月記』の書かれた平安末期から鎌倉初期は、公家社会から武家社会への転換という、日本の歴史上稀にみる大きな変革期にあたる。平清盛の全盛、福原遷都、壇ノ浦の戦い、鎌倉幕府の成立など、歴史上よく知られた出来事がこの時代に相次いでいる。

こうした社会の動乱は、いわば旧勢力である公家社会、そしてその中心地である京都の衰退・荒廃を招いていく。飢饉によって藤原定家の邸の近くにも日々死体が増えていくこと。藤原定家の従者にも栄養失調者が現れたこと。殺人や強盗が横行し、身分の高い貴族でもそこから逃れられなかったこと。荘園からの収入が滞り、その取り立てに苦慮すること。これらは、すべて『明月記』の中に、簡潔に、しかし克明に記されている。

また、『明月記』には、若くエネルギーな後鳥羽上皇の気まぐれな行動(和歌を含め、昼夜を分かつた行われた各種の「遊び」)に付き合わされてひそかに歎息する思いや、貴族社会での出世がいつ実現するか展望を持たない苛立ちも、時に過激な表現をもって書き綴られている。現代の企業社会や組織人にも通じるようなこうした思いは、藤原定家を歴史上の偉大な歌人としてだけではなく、ひとりの人間として生き活きと伝えている。

いずれにしても『明月記』は、藤原定家の生きた時代の世界にまつわるさまざまな「分からなさ」や「不確実性」を記している。そうした不確実性の中で、藤原定家は当時、吉凶を示す「天変」とされていた天文現象に大きな関心を寄せる[12]。古くは飛鳥時代から、朝廷や貴族社会における天文の主要な目的は「占い」であり、天文現象は不確実性の高い将来を「分かるようにする」ための「よすが」となっていたと言える[13]。

それから 800 年あまり。世界の「分からなさ」や「不確実性」は、藤原定家の時代とは異なった姿をとりつつ、現代に生きる私たちの身の回りに存在している。

例えば、金融の世界を考えてみる。株価でも為替相場でも、たった 1 分後の、いや、1 秒後の値動きすら正確には予想できない。生死や健康といった、ひとりひとりにとってのもっとも切実な問題も同様である。藤原定家の時

代と異なり、飢饉や殺人におびえる度合いは格段に減ったとしても、介護や認知症など、現代ならではのさまざまな不確実性が私たちの生活につきまとい続けている。

こうした、いわば将来の「分からなさ」だけではない。他人が本当のところ今何を思っているのか。そもそも、人間がものを「思う」、「意識する」、あるいは「自由意思を持つ」というのはいったい何であって、どういうメカニズムによっているのか。こうしたもともと身近なことすら、私たちには「分からない」。

そうした現代社会にあって天文学は、私たちからもっとも時間的に隔たったビッグバンはもとより、さらにその前の宇宙の姿でさえも描き出しはじめている。このように、私たちからもっとも隔たった世界のありようが「分かる」ことは、「世界は私たちにとって理解可能である」という強い信念を抱かせる。さらに、そのことは「宇宙の果てよりももっと身近な事柄であれば、今は分からないことでも、いずれより良く分かるのではないか」という希望を強めることにつながっていくのではないだろうか。

このように考えてみると、天文学は人類のさまざまな —— いや、あらゆる、と言うべきか —— 知的営みを力強く励まし、そして牽引する力を持っているのではないか。著者には、そのように思えてならない。

天文学と和歌。このふたつは、一見何のつながりもないようにみえながら、私たち現代人の中に不思議なほどの自然さで共存している。このことは、このふたつが思いがけない、そして今よりも一段と密接なつながりを持ちうることを示唆しているのかもしれない。

藤原定家は、その歌論『詠歌大概』の冒頭において「情（こころ）は新しきを以て先となし、人のいまだ詠ぜざるの心を求めて、これを詠ぜよ」と説いている[14]。「何よりも、人のまだ捉えたことのない新しさを求めよ」

という意となる。この藤原定家のところは、現代の天文学や宇宙論のころと完全に一致するのではないだろうか。

天文学や宇宙論、そして、いにしえの和歌や現代の短歌。これらは、きっとこれからもお互いに重なり合うころざしを持ちながら、私たちのなかに共存していくことだろう。



図2 トークイベントの様子

7. 市民がつなぐ天文学と社会

さて、共著者（佐久田）から推薦経緯を含め上述のような話を聞いていた高梨は、このプロセス自体が天文学と社会を繋ぐユニークな事例のひとつであると考えた。知の循環モデル[2]では、天文学の知が人々の持つ世界観に取り込まれていった後に社会的価値の発生につながると考えるが、共著者の行動がまさにその例であるように感じられたのである。天文学やその教育・普及とはまったく関わりを持っていなかった共著者が天文学と社会を繋ぐ役割を担ったことは、これからの天文学と社会のあり方を考える上で参考になる。そのように感じた高梨は、経緯をヒアリングする公開のトークイベントの実施と、文書での記録（本稿の執筆）を行うことにした。

トークイベントは、日本天文遺産の認定からすぐの2019年3月25日の夜に、東京大学本郷キャンパス内にある伊藤国際学術研究セ

ンターにて開催した（図2）。佐久田と岡村定矩氏をスピーカーとし、高梨が司会進行を務め、20名ほどの参加者を集めて実施した。イベントで佐久田が紹介した内容は本稿と被るので改めて述べないが、岡村氏からは『明月記』に記載されている天文現象の存在を初めて国際的に知らせた射場保昭氏についての紹介があった。射場氏の活躍については竹本修三氏の報告[15]等に詳しいが、天文愛好家であった射場氏が世界に紹介した『明月記』が、今度はより天文学からは距離がある佐久田によって日本天文遺産に推挙されたことは、天文学が文化の中に編み込まれていく過程を象徴しているようで興味深く思われた。

8. おわりに

本稿では、『明月記』の日本天文遺産への推薦のいきさつを紹介するとともに、藤原定家の和歌や『明月記』を手がかりにして、天文学や教育普及とはまったく縁の無かった佐久田がどのように天文学や宇宙を受け止めていったのかをまとめた。天文学が社会の中に深く編み込まれていけばいるほど、天文学にとくに興味関心を持っていたわけではない市民が、ふとしたきっかけからこのようなアクションを取ることにつながる機会が増えるだろう。そう考えると、今後、天文学と社会のコミュニケーションがより進んでいくことで同様の興味深い事例が多く生まれていくと期待される。それらの事例を幅広く集め、蓄積していくことは、今後の本会の活動のひとつになるのではないだろうか。読者諸氏の周囲にも、同様の事例があればぜひ報告されることを願って、本稿の終わりとしたい。

謝 辞

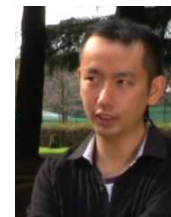
日本天文遺産への推薦や本稿の寄稿など全般に関しては、岡村定矩氏（東京大学名誉教授）にご助言やお力添えを頂きました。このほか、日本天文遺産への推薦にあたっては、佐々木節氏（東京大学カブリ IPMU 副機構長）、中嶋浩一氏（一橋大学名誉教授）にもご相談に乗っていただきました。また、『明月記』を管理する公益財団法人冷泉家時雨亭文庫の冷泉為人理事長・冷泉貴実子理事はじめ関係者の皆様には、日本天文遺産の趣旨に深いご理解を頂くとともに、推薦へのご快諾を頂きました。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

文 献

- [1] <http://www.emp.u-tokyo.ac.jp/>
- [2] 高梨直紘他（2014）『「知の循環」の文脈での対話型イベントの実施事例の報告：まるのうち宇宙塾の取り組み』、天文教育、26(3), 2-16.
- [3] <http://sundai.sakura.ne.jp/>
- [4] <http://reizeike.jp/>
- [5] 福江純（2002）『客星あらわる』、天文教育、14(4), 66-77.
- [6] 臼井正（2004）『藤原定家の客星』、天文教育、16(6), 11-16.
- [7] 作花一志（2013）『明月記コースと藤原定家』、天文教育、25(2), 15-19.
- [8] 馬場あき子、米川千嘉子（1988）『和歌の読みかた』、岩波書店
- [9] 本居宣長（萩原延寿訳）（1970）『日本の名著 21 本居宣長』、中央公論社
- [10] 正岡子規（1955）『歌よみに与ふる書』、岩波文庫
- [11] 湯川秀樹（2016）『湯川秀樹歌文集』、講談社
- [12] 京都大学編（2014）『明月記と最新宇宙像』、アクティブ KEI
- [13] 齊藤国治（1982）『星の古記録』、岩波書店
- [14] 橋本不美男ほか校注・訳（2002）『歌論集 新編日本古典文学全集 87』、小学館
- [15] 竹本修三（2015）『明月記をめぐる射場保昭と神田茂・井本進との交わり』、天文月報、108(7), 429-437.



佐久田 健司



高梨 直紘